原三溪を語ること

三溪園　中村　暢子

はじめに

三溪園を創設した原三溪（本名:富太郎 1868―1939）は実に多彩な顔をもつ。実業家として横浜の生糸貿易振興を担ったことに加え、古美術や古建築を蒐集し（コレクター）、若手の芸術家を支援し（パトロン）、ときに自らも書画を嗜み（アーティスト）、茶の湯を楽しむ数寄者でもあった。こうした事績を反映し、しばし用いられるのは「多面体」という言葉である。では、「大正12年」という時間軸のスポットを当てたとき、浮かび上がる三溪像はどのような姿だろうか。

本稿では、2023年9月1日～12月10日の会期で開催した企画展「大正12年の原三溪　良きも悪しきも―大師会茶会と関東大震災―」について、構想の段階から展示に至るまで、そして、反響と成果を記していきたい。

1．展示の構想

(1) はじまりは年表から

関東大震災から100年という節目の年、三溪園ではもう一つの周年が重なっていた。「三溪園で大師会茶会が開催されてから100年」である。大師会茶会は「利休以来の大茶人」とも称された、三井物産の益田鈍翁（本名：孝）が始めたもの。かねてより鈍翁からせっつかれていた三溪にとって、満を持しての会場提供であったことは想像に難くない。100年の時を経て、我々も記念茶会を計画していた。

点と点がつながり、線となったのは、なんとはなしに眺めていた年表からだった。『三溪園100周年　原三溪の描いた風景』（神奈川新聞、2006年）において、大正12年（1923）の項には、次のように記されている。

――4月21、22日　内苑の完成を記念して大師会茶会を開く。

――9月1日　箱根の別荘で関東大震災にあう。松風閣、聚星軒、望仙亭、原善三郎銅像が倒壊するなど諸所に被害を受ける。

――10月　内閣の復興院評議会委員に就任。美術家支援を終了する。

三溪が先代の原善三郎から受け継いだ広大な三之谷の地に、京都や鎌倉などから多数の古建築を移築し、庭師を奈良に派遣することから始めた庭造り。大正11年に聴秋閣の移築完了をもって全園が完成。お披露目を兼ねた大師会茶会も無事に成功し、めでたし、めでたし…ではなく、その数ヶ月後に大震災に見舞われるのである。そして、自身の資金を震災復興に宛てるため、パトロンとしての活動からは撤退する。なんとアップダウンの激しい1年であろうか。年譜の数行から、一人の人間としての三溪像が浮かび上がる。

横浜の震災復興のために三溪が奔走したことは、すでに原三溪市民研究会による成果[1]や各展覧会でも報告されている。「聖人君子」として知られる三溪だからこそ、大正12年に起きた、振れ幅の大きさそのものを展示でみせていこうと思うに至った。ゆえに、企画展のメインタイトルは「大正12年の原三溪」とした。副題は、江戸時代末期、横浜で一番の生糸売込商として知られた先代・善三郎を称してうたわれた、「横浜は善きも悪しきも亀善（亀屋と善三郎の頭文字）の腹（原）一つで決まるなり」から拝借した。

(2) 三溪園における三溪記念館の位置づけ

展示をどう組み立て、どのような層にアピールする内容にしていくか。三溪記念館を担当する者としてのひそやかな悩みを起点に検討を進めた。

三溪園はまずもって庭園である。国の名勝にも指定されており、重文クラスの古建築が多数ある。春の桜、秋の紅葉の時期が繁忙期であり、季節の草花を愛でにいらっしゃるかたが大半である。園の中心に位置している三溪記念館は、立地は悪くないながら、展示までご覧くださるかたは多くはない。平均して入園者全体の2割強である。しかし、今回の展示はぜひ観ていただきたい。少なくとも来園者のみなさまには！そして、これからの園

の活動を継続的に支援いただくことを期待して、30-40代の中年層に訴えかける展示にしよう。こうして企画展の目標とターゲット層が決まった。

2. どのような展示をしたか

展示のキーテーマは「原三溪を軸にみる大正12年」である。一人の人間として、三溪がどのように転換期を生きたのか、関連資料とパネルで紹介する形式をとった。三溪の言葉、事績、伝えたいことはたくさんある。ただし、読んでもらえなければ意味がない。日頃からSNSに親しんでいる世代は、Xの短文、Instagramで投稿される1枚の写真、数秒間の映像から、その先も見続けるかどうかを瞬時に判断するという。そのため、パネルの大きさと掲載する文字数は吟味した。伝えたいメッセージの内容、展示のなかでどのような位置を占めるかによってサイズを決め、メリハリをもたせた。具体的には、B1サイズは章、A1サイズは節に相当するものとした。

また、三溪の言葉を掲出する際は、A2サイズのパネルを黒フレームの額に入れ、解説パネルとの差異化を図った。文字数は、メインの章パネルでも120字程度にとどめた。さらに、「読んでみようかな」と思えるリード文を付し、最低でもリード文だけをたどっていただければ展示の大枠がつかめるよう留意した。

たとえば、展示冒頭のパネルは「富という豊かさを手にいれたとき、あなたはどうしますか？」という問いかけから始めた。お金を何にどれくらい使うか、その人の価値観が端的に表れる部分であり、私たちの主要な関心事の一つでもある。生糸貿易で財を成した原三溪が、その富をもって何を成したか。「お金持ち」という枠組みから、自分とは違う次元の人として仰ぎ見るのではなく、一人の人間として捉えてほしいという意図もあった。コロナ禍を経て、自身の時間、お金の使い方に意識的になったかたが多くなった現状を踏まえ、投げかけたメッセージでもあった。

文章の出し方として、もう一つ工夫した点がある。『原三溪翁伝』に記された三溪の言葉は、現代人にとっては表現が固い。哲学者・ニーチェの言葉も噛み砕いて超訳される現代である。原文では「平素成るべく雑多の公職を避け精力と時間との余裕を貯へ一朝事あるに当つては自己の全精力、全時間を傾注して其事件の達成を期す事」[2]とあるのを、パネルでは「普段は余力を残しておく。いざとなったら、全精力と全ての時間をそそぎこみ、課題の解決にあたる」と置き換えてみた。会期初日から、三溪の言葉をメモするお客さまの姿もあり、うれしく思った。

特にみなさんが熱心に見てくださったコーナーは、三溪が箱根の別荘・白雲洞で被災してから、横浜へ戻るまでの道ゆきを地図に落とし込んだパネルだった。箱根・小田原から東海道を経るルートは、箱根駅伝の往路とも重なり、イメージがしやすかったのかもしれない。

三溪が横浜に戻ってから、復興会の会長を引き受けるまでの日々（大正12年9月5日から9月30日）は、トピックとなる日を1日ごとに紹介し、ドキュメンタリーを見ているような効果を狙った。見出しの言葉はデザイナーと何度も調整を重ねた。

会期途中から試行的に展開したこともあった。取材にいらしてくださる記者のかたがそろって関心を寄せるポイントが、大正14年、横浜の復興事業が着実に進行していくのを祝し、三溪が自ら作詞した「濱自慢」のレコードだったのである。二言目には「どのような曲調だったのですか？」。当然のご質問である。歌詞はパネルに記載していたものの、節やメロディーは聴いていただくほかない。音源を三溪園のYouTube公式チャンネルにアップし、URLを二次元コード化し【参考1】、印字したカードを配架することにした。有難いことにどんどんはけ、毎日のように増刷した。

全体を通じて最後まで迷ったのは、呼称の問題である。本名、そして、実業家としての側面を強調するのであれば、「原 富太郎」である。一方、数寄者としての呼び方を尊重するのであれば、「原 三溪」となる。震災後の活躍は実業家としての側面が強いが、今回の展示は大師会茶会も重要なテーマである。さて、どうするか。実業、芸術、茶道に通じた三溪は、その「大茶人的性格」によってそれらが一体であると語ったのは、茶友であった松永耳庵（本名：安左ヱ門）。本展ではこの見立てに倣い、あえて「三溪」の呼称で統一した。

3. どのような反響があったか？

会期中の観覧者数は49,489人で、会期中入園者数のうち約48％、つまり、2人に1人は展示を観てくださったことになる。そして、現場の肌感にはなるが、じっくり展示をご覧になっているかたを多

くお見受けした。特に、今回の展示を届けたかったメイン層（30-40代）の姿が通常より多くいらしたことは印象的だった。

感想ノートには次のようなコメントが並んだ。「三溪さんの言葉の文章を読み、自分の幸せのみを考える姿勢を反省させられました」、「震災の時期にあって素晴らしい行動をされたかたとは存じませんでした」、「三溪氏の大きさに感激しました」等々。関係者からは、このまま常設展として残しては？というコメントもあった。それほどに、大正12年は原三溪の生きざまを端的に表した年だったといえよう。

閉催後もじわじわと反響があり、ガイドボランティアさんからは「今後、お客さまをご案内するときの参考にしたいので、パネルを共有してほしい」とリクエストがあった。広報担当者に相談したところ、展示の流れにそって、主要なパネルと作品をHPにアップすることになった。結果として、展示の概要が端的にわかるページとなり、展示記録としての成果物を広く共有できるかたちで再発信することができた【参考2】。このページをみて、後日、高校生から「授業で関東大震災のことを調べているが、三溪園でどのような被害があったか知りたい」との問合せもあった。

4. これからの語り方
ーヒストリーからストーリーへー

三溪園内の人間にとっては自明の存在である原三溪。しかし、全国的な認知度はどれくらいであろうか。お客さまの多くは、まずは庭園を目的に来園され、三溪記念館で創設者の事績を知り、「こんな人がいたのね…」と感嘆して帰られる。コアなファン層は貴重な支援者であることに変わりはないが、より多くの層に届ける必要がある時期にきているのは確かである。

研究史的にみても、原三溪について歴史的に述べられた著作は数多くあり、一定の成果も出ている。これからは、こうした成果をもとに、事実をたんたんと述べるのではなく、歴史的事項の間をつなぐ文脈を加えながら、一つのストーリーとして語ることが求められているのではないだろうか。最近では、芥川賞受賞作家の永井紗耶子さんが書かれた『横濱王』（小学館、2018年）という小説もあり、この本をきっかけに関心をもつかたもいるようだ。

時代の動きにあわせて、原三溪の語り方も変わってくる。それは、いまの時代に生きる人々が何に関心をもち、どのような価値観で生きているのかを捉えながら変えていくものであろう。原三溪という人物をいかに伝えていくか―。今回の経験をもとに、工夫を重ねていきたい。

【参考1】
原三溪　復興小唄「濱自慢」
（三溪園 YouTubeチャンネル）

【参考2】
三溪園通信「大正12年の原三溪」（三溪園HP）

註

1『マイウェイ』No.77（特別記念号　原三溪に学ぶ公共貢献物語）はまぎん産業文化振興財団（協力：原三溪市民研究会）、2011年。

2 藤本實也 著、三溪園保勝会・横浜市芸術文化振興財団 編『原三溪翁伝』思文閣出版、2009年、p.544。